

皇太子さまをお迎えして 日本山岳会平成20年度年次晩餐会 開催

■466人が出席

平成20年度年次晩餐会は12月6日、東京・品川のグランドプリンスホテル新高輪国際館パミール「北辰」で開催された。皇太子さまがお忙しい公務のなか3年ぶりに出席されたのはじめ466人の会員が集い、なごやかに歓談した。

■会長挨拶

皇太子さまは、今年8月、念願の富士山に初登頂された。年次晩餐会のテーブルも「富士山」と名

づけられていた。晩餐会に先立ち秩父宮記念山岳受賞講演会にも出席された。宮下秀樹会長は、お迎えてきたことを喜び、続いて日本山岳会の現状について次のように報告した。

一、今年は大きな成果があった。インドヒマラヤのカランカ峰北壁に天野、一村、佐藤の各氏が初登攀し、アジア・ゴールデンピッケル賞を受賞した。平出氏はインド・カメット峰の南東壁に初登攀した。しかし、チベット・クौरラカンリ

では雪崩による悲しい事故があった。岩手では大地震でバスが転落し大きな事故となった。日・中・

韓三国学生交流登山は、韓国・雪嶽山^{ソルセク}などで行なわれた。来年は中国の6000^{メートル}級の山に挑戦する。

一、12月19日から1カ月間、剣穂高、八ヶ岳の3地域を対象とし、日本山岳会が冬山の天気予報を発信する。大いに利用してほしい。

一、元気な会員を紹介したい。南川金一会員は、機関誌『山岳』の編集に尽力されたが、2000^{メートル}以上の642座を7年前にすべて登頂された。今度は1900^{メートル}の山々に挑戦され、もう少しで終わるとのこと。南井英弘会員はペースメーカーを入れて高所登山を続けておられる。西孝子会員は20年来、ヒマラヤ通いを続けておら

れ、今年15回目のカラパタールに登頂された。

一、3つのことをお話ししたい。

1つは、12月から施行された法人改革は会の行く末を決めるものであり十分に検討していきたいこと。2つ目は各地で展開されている森づくりで、日本山岳会ならではの森づくりがどのようなものか、運営ルールを考えたいこと。3つ目は、山の記念日の制定に向けて活動したいことだ。「山を敬い、山を尊ぶ」という言葉をもとに、美しい自然を後世に残すきつかけとなればと思っている。

■新名譽・永年会員の紹介

物故会員に対して黙祷した。昨年の晩餐会以降に亡くなられた会員は52人。太田敬・坂倉登喜子・



466人が出席した年次晩餐会で挨拶する宮下会長

川崎精雄名誉会員らが逝去された心からご冥福をお祈りしたい。

新名誉会員が紹介された。2人の中村会員だ。中村純二(会員は1984年にカラコルム学術登山隊の総隊長として参加された。副会長などを歴任し、会の発展に尽くされた。中村保会員はヒマラヤの東の調査を続けられ、今年4月には英国王立地理学協会からメダルを受賞された。英文ジャーナルの編集に尽くされ、日本山岳会の活動を世界に発信された。英文ジャーナルの編集に対しては、その功績をたたえ「会長特別賞」を贈呈した。

中村保・新名誉会員は「8年前

にアメリカから日本の活動が分からないと言われた。そこで日本の活動を世界に発信した。欧米のみならず、世界に理解されてきたと思う。今日は私の74歳の誕生日。いい星の下に生まれた、と勝手に思っている」などと語った。

新しい永年会員は35人。1958年4月から翌年3月までに入会した会員だ。以降継続して50年間会員として活躍された。会員番号は2555と4656から4832である。18人が出席し、宮下会長から永年会員章が手渡された。

新永年会員を代表し、酒井敏明会員は「53年のエベレスト、56年のマナスルと、ヒマラヤのジャイアンツが次々と未踏峰の座を明け渡していた時代だった。深田久弥さんが雑誌にヒマラヤの物語を連載していた。桑原武夫先生は、山登りは文明人のみが行なう文化的行為であると言われた。山登りは、間口が広く、奥行きが深い」などと話した。

新永年会員

秋月良造、酒井敏明、森元一、保坂隆司、土屋満、荻野昌宏、住吉仙也、山崎徹、阿部顕二、宝井俊夫、野村哲也、田邊卓司、中野明、

山本良子、奥原教永、土合敦彦、早川瑠璃子、市川英脩、高石清和、鈴木羊三、穴田雪江、進藤昭、山本久子、小森恵己子、隈部恵子、音成彦始郎、稲垣純男、日高健二郎、渋谷正己、星讓、吉武正子、庄司駒男、佐藤俊彦、大橋晋、内藤修

秩父宮記念山岳賞

第10回秩父宮記念山岳賞は、「大日岳巨大雪庇の研究」と東海支部の「ローツェ南壁冬季初登攀」に決まった。表彰式が行なわれ、巨大雪庇の研究に携わった川田邦夫、飯田肇、横山宏太郎の3会員、また東海支部の尾上昇、田辺治の両会員が表彰された。

■新入会員は51人

続いて、新入会員の紹介。今年51人が新しく会員に加わった。代表して堺澤清人会員が挨拶した。「先輩諸氏の指導をお願いしたい。いままで山々に教えてもらったいろいろなことを若い人たちに伝えたいと思う。自然環境の再生などにかかわっていききたい」などと話した。

恒例の鏡開きは、皇太子さま、

宮下会長のほか中村純二・新名誉会員、秩父宮記念山岳賞を受賞した川田邦夫会員と田辺治会員、元国土交通相・谷垣禎一(会員)の6人で行なった。酒は故今西壽雄名誉会員の夫人から寄贈のあった「四海王」。いつもながら、感謝したいと思う。西孝子会員の音頭で乾杯し、会食が始まった。

メニューには「山を愛する方々へ、大地と海のコラボレーション」、「実り多き秋から雪の降りをはじめの山の雰囲気」などと、シエフからのメッセージが添えてあった。

会食をはさんで全国28支部会員の紹介があった。参加者は紹介されるたびに立ち上がりハンカチを振った。毎年恒例のイベントだ。

■海外登山報告

晩餐会に先立って午後2時から、1階「紅玉」の間で海外登山報告と秩父宮記念山岳賞受賞記念講演があった。

GRIGIRI BOYS インドヒマラヤ登山隊(一村文隆隊長、佐藤裕介、天野和明各隊長)が、インドヒマラヤ・カランカ(6931メートル)北壁を初登攀した。1800メートルの上部岩壁を7ピバークで突破し、



貴重な図書が展示された山岳図書展

9月22日に登頂。天野隊員は「スノーシャワーが激しかった。氷壁を削り、改造テントをかぶるようにしてビバークした」などと語った。この登攀は、韓国で「ピオレドオールアジア」を受賞した。

カメット南東壁登山隊（平出和也隊長、谷口けい隊員）では、平出氏が昨年に続いて講演した。インドヒマラヤ・カメット（7756¹）南東壁の初登攀を報告した。標高差2000¹の南東壁中央にラインを引いて、6ビバークで10月5日に登頂した。「ルート図のない壁の挑戦だった。7日間取り付いて、雪崩の起きる時間が分かるようになった」などと話した。

■秩父宮記念山岳賞講演

今年の秩父宮記念山岳賞は久々に複数の受賞となった。講演会に参加した人は雪庇の巨大なことに驚き、ローツェ南壁へのあくなき挑戦に感激した。講演会には、皇太子さまも出席された。

「大日岳巨大雪庇の形成機構に関する研究」は川田邦夫、飯田肇、横山宏太郎の3会員。2000年3月5日、大日岳の山頂付近で巨大雪庇が崩壊し冬山研修を行っていた2人の学生が死亡した。これを契機として多くの人が巨大雪庇について研究した。現地調査が2005年4月7日〜27日に行なわれ、登山家、ガイド、研究者など総勢51人が参加した。

調査結果によると、巨大雪庇は稜線沿いに200¹にわたり発達し、先端は稜線から32¹、深さは最大18¹に達した。それは、山稜から数十メートルも風下側に発達する吹きだまり状の積雪構造だった。講演では、概要を横山会員、巨大雪庇の形状を飯田会員、雪庇の形成と消滅を川田会員が担当した。

冬季ローツェ南壁初登攀は東海支部登山隊（尾上昇・総隊長、田

辺治・登山隊長。2006年12月、東海支部登山隊は3度目の挑戦でローツェ南壁の冬季初登攀に成功した。世界第4位の高峰ローツェに突き上げる標高差3300¹の巨大岩壁だ。

講演会で尾上総隊長は「登山はオーソドックスな極地法を採用した。確実に安全という選択。いちばん苦労したのは隊員集めだった。冬のローツェに行く隊員は極めて少なかった」と話し、田辺登山隊長は「冬の8000¹峰はマイナス50度、50¹の風が吹く。体感温度は相当なものになる。しかし雪が降らない。雪崩の心配がない。クリスマスイブまでは好天が続く。短期決戦だった」などと語った。

■貴重な図書を展示

慶雲の間の催し会場。正面を飾ったのは、皇太子さまの写真「雲表のマナスル山群遠望」だ。説明には「ネパールヒマラヤ機窓より」とあった。20年ほど前に撮影されたものをデジタル処理で甦らせたものだという。資料映像委員会・アルパインフォトクラブによる山岳写真展には40点ほどの山岳写真が展示された。

山岳図書展には、図書委員会が日本山岳会の書庫に眠っている貴重な図書を出展した。文化9（1812）年発行の谷文晁「日本名山圖會」、明治26（1893）年発行の高島得三「歐洲山水奇勝」など、和書33点・55冊、洋書26点・38冊が展示された。

日本山岳会に図書室が設置されたのは昭和4年だったという。20年に空襲で消失し、24年に再建された。現在は和書1万2000冊、洋書4000冊を収蔵している。

支部、同好会、同期会が、それぞれに山岳書籍、文献、地域活動報告などを展示・販売した。

■筑波山で懇親会

翌日の懇親山行は集会委員会が主催し、茨城・筑波山で行なった。晴天に恵まれたこともあり、参加者は100人近くにもなった。遠方からの参加者が多く、時間を節約するため、上りはケーブルを利用、頂上から北側へ三々五々歩いて下り、暖かい日だまりのなか、筑波高原キャンプ場で豚汁を楽しんだ。

（文＝高橋聖之）